タスク・シフト/シェアに向けて当院での取り組み

◎関根 綾子¹⁾国立大学法人 岐阜大学 医学部附属病院¹⁾

令和3年10月1日から医師の働き方改革を進めるためのタスク・シフト/シェアのために「臨床検査技師等に関する法律施行令の一部を改正する政令」が公布された。タスク・シフト/シェア10行為の業務を行おうとする場合はあらかじめ、厚生労働大臣が指定する研修を受けなければならないとされ、各都道府県技師会による研修が実施されている。また、現行制度の下で実施可能な業務として18項目が選定されたことにより業務範囲が拡大され我々臨床検査技師の活躍の場が広がり医療機関でのチーム医療への参画が求められている。岐阜県においてはコロナ禍でなかなか開催されなかったタスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会実技研修の第一回目が令和4年5月8日に開催され、岐阜大学医学部附属病院（当院）から4名がこれまでに修了し、3年後までには80%以上の修了を予定している。

当院においては法改正される以前の令和3年3月からタスク・シフト/シェアの推進について病院全体の問題として院内会議で討議を重ねてきた。指定研修により行えるようになった10行為に関して5月末の時点で当院ではいずれも実施できていないが、第一段階として生理検査部門として術中脳脊髄モニタリングと超音波検査に関連する行為を今後行っていく予定である。術中脳脊髄モニタリングに関しては診療科からの要望があり平成18年から生理検査も携わってはいたが、針電極の装着が可能となったため準備時間の短縮が見込まれる。超音波検査に関連する行為として静脈路を確保し、造影剤を接続・注入する行為、当該造影剤の投与が終了した後に抜針及び止血する行為が可能となったため、当院でも導入を検討している。以前から経食道心臓超音波検査時には、我々検査技師が超音波装置の操作のため立ち会っており、マイクロバブルテストが積極的に行われている。その際に①静脈に点滴ラインの確保、②三方活栓で連結した2つのシリンジにより生理食塩水と空気および患者血液を用手法により攪拌しコントラスト剤を作成する、③作成したコントラスト剤を用いバルサルバ負荷を行う、という行程を要するのだが、現在は検査施行医以外の別の医師がこれを行っているため、検査技師が一連の造影作業技術を習得する事で検査施行医以外の医師が不要となり、タスクシフトとなるのではないかと考える。

さらにタスク・シフト/シェアと言うと一般的に医師から多職種へのタスクシフトを連想しがちであるが、多職種から多職種へのタスクシフトも当院では討議を行ってきた。今回のタスク・シフト/シェアとしての拡大される業務は生理検査部門が携わる項目が多く、私達、臨床検査技師も日々の業務過多に加えてISO15189や診療科要望への対応で余力のない現状があり、臨床検査技師から事務補佐員等へのタスクシフトにより事務処理等の軽減も有効であると考え。当院では平成31年から生理検査室に事務補佐員が常駐している。当初は簡単な雑務のみを考えての導入であったが、物品発注やパソコン作業、診療科からの問い合わせなどの電話対応等を行ってもらった事で今ではかかせない存在となっており導入した事で臨床検査技師から事務補佐員等へのタスクシフトが行えた。タスク・シフト/シェアが求められる業務内容は施設毎に異なると思う。実際に当院では指定研修により行えるようになった10行為以外の病棟採血や生理検査枠拡大の要望の方が多いかもかもしれない。

本講演では、今回の法改正を前向きに捉えて、生理検査部門として行えるタスク・シフト/シェアについて、当院のこれまでの取り組みと今後について簡単にではあるが紹介させて頂きたいと思う。

連絡先：058-230-7261